

パルマにて

パルマで過ごす最後の日曜は、花フェスタの日でした。普段は静かでエレガントな通りが、様々な出店で埋め尽くされていました。花や小物を売るテントの間を、マリア様の聖像を担ぐフィリピン人グループが行列し、この小さなフェスタに賑わいを添えていました。わたしは色とりどりの花々を楽しみながら、パルマの共同体で過ごした日々を名残惜しんでいました。

わたしの所属している聖心のウルスラ宣教女修道会は、1587年このパルマの地から始まりました。大きな修道院の建物には、シスターたちの長い歴史が染み込んでいます。廊下を歩く靴音、どこかから反響して聞こえる話し声、風が吹くとギーッと鳴る窓など、静かにしていると様々な物たちが語り出すように思えます。中でもわたしに強く響いてきたのが、修道会の歴史の心臓部である資料館でした。わたしたちのパルマ滞在の一か月は、この資料との対面が主な目的でした。



それは、資料館の引っ越しから始まりました。会の歴史を物語る資料は、わたしたちが到着した時には一時保管所に置かれていました。薄暗い誰も使っていない部屋のスチール棚から、床が張り替えられ新品の木製書棚がずらりと並んだ部屋へ、わたしたちは長い廊下を上がったたり下がったりしながら資料を移し替えてゆきました。革張りのどっしりとした古めかしい資料から、現代のすっきりとまとめられたファイルまで、様々な書類を手にし、それを指揮する総長様のもとで、埃をはらったり分類別に並べたりしました。

二日間に及ぶ引っ越し作業が終わった後、今度は目録作りをしました。書棚別にどのような資料が収められているのかを書き記していきます。資料に書かれている流暢なイタリア語を解説するのに苦心し、仲間同士で助け合いながら、少しずつ作業をすすめてゆきました。「パルマ侯爵の手紙」「寄宿学校生徒の表彰」など、タイトルから様々な内容を想像してみるのも楽しい時間でした。

目録が出来上がった後で、わたしたちは総長様から様々な資料の解説を受けました。会の創立者であるマッダレーナ・モリナリの自筆の手紙や、様々な時代の中心人物の遺物や手紙を目にすることができました。とりわけ、会の最古である1623年の会憲を手にし、そのページに触れることができたことは、わたしにとって深い喜びでした。

この1623年の会憲のコピーを、わたしは修練期の時に読み、深い感銘を受けました。そこに、新しい時代の新しい生き方を宣言する女性の姿が、瑞々しく表されていたからです。当時のイタリア社会では、若い女性は結婚するか、禁域に住む修道女になるかのどちらかの道しかありませんでした。その時代の中で、ウルスラの名を名乗る若い娘たちが、社会に奉仕しながら、神様に自分を捧げる生き方をこのパルマの地に拓いたのです。

今はもうすっかり色あせて、革表紙も剥げ落ちてしまっているこの小さな会憲は、今でもその創立の喜びを謳っているように思われてなりません。わたしはその声に耳を澄ませて、確かにその息吹を受け取る恵みをいただいたのです。